



# 地域の サンタ プロジェクト 2019 レポート





## はじめに

あうるすぽっとのビジョンは「人と文化が集う、みんなの劇場」です。

ここに掲げた『みんな』をキーワードとし、「いども・つなぐ・ひろく」をミッションとして様々な事業を展開するなか、今までの歩みの上にまた新たな事業が生まれました。名付けて「地域のサンプラザプロジェクト」。

劇場ならではの手法で、地域とつながり、場所＝劇場をひろくことを試みました。

本誌はこのプロジェクトの記録です。記録を残すことにより、このプロジェクトの意義を再確認し、多くの人々と共有し、さらに発展させていくことを目的としています。

多様な人々が行き交うまちの「みんなの劇場」として、人と人、人と体験をつなぐ存在でありたい。

そして多様な人々に「ひらく（開く、拓く、啓く）」場であること。誰もが舞台芸術にふれることのできる環境づくりを行うとともに、それぞれの目線に立った様々な配慮と工夫を続けていきます。

本プロジェクトともまさにそのよう理念のもとに進めました。この記録を通じて皆さんが様々な環境に置かれている多くの子どもたちに思いを馳せる時間を作り出せたらと思っています。

あうるすぽっとが、みんなにひらかれた場、新しい道を切り拓き、わからないことを理解し、ともにわかりあう場、そして「誰にとっても、安心して新しいことに臨める場所」になるべく歩みをさらに進めていきます。

2020年3月  
あうるすぽっと



## 人と文化が集う、みんなの劇場 あうるすぽっと

2007年9月、東京メトロ東池袋駅に直結するライズアリーナビル内に、あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）は誕生しました。

約300席の劇場では、これまでに、親しみやすい良質の舞台公演から、実験的な作品や、国際共同制作まで、様々な公演事業を開催してきました。また、区立劇場として地域のみなさまに向けた参加型ワークショップやアウトリーチを実施するほか、芸術文化活動を支える人材を対象にした講座なども、継続して実施してきました。

開館から10余年を経て、今後は、豊島区が掲げる「国際アート・カルチャー都市構想」をふまえ、多くの劇場が集積する「演劇の街・池袋」の拠点として機能し、芸術文化を通して多様な人々が集い交流する「みんなの劇場」として、活力に満ちた豊かな地域社会の実現を目指していきます。

### ミッション

いどむ  
いどむ

舞台芸術作品の創造・発信を通じ、豊島区の発展と地域の活性化に寄与します。

つなぐ  
つなぐ

地域社会の文化芸術及びコミュニティ活動に地域劇場として貢献します。

ひらく  
ひらく

多様な人々の交流や活性化を促進し、社会的価値を醸成します。



## プロジェクト概要

あうるすぽっとでは豊島区の地域課題を見つめ、演劇の手法を用いながら解消を目指す事業を開館してまもなく取り組み、スタイルを変えながら継続してきました。

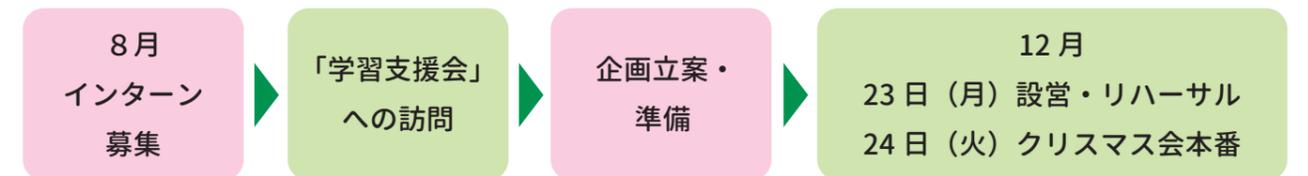
2018年度より特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク（以降、WAKUWAKUネットワーク）が開催する「学習支援会」・「子ども食堂」の子どもたちを招いたクリスマス会を開始しました。

企画立案・運営を文化行政等でのキャリアを志す大学生を中心にインターンを公募し、実践の場を提供しました。課題をファシリテーターと共にディスカッションを行い、テーマを精査し、その後、交流促進や課題解消の方法を考えながら、地域へと還元していきます。その過程のなかでの人材育成に繋がることも目標としています。

この事業は、あうるすぽっとが目指す「みんなの劇場」の一環として「まち」の「人」にかけがえのない出会いや気づきを「演劇の手法」を使って生み出すことを目的としています。「まち」は豊島区周辺、「人」は、舞台芸術を観る・体験する機会が少ない人などと位置付けます。「演劇の手法」を応用するのは創造・発信型劇場の強みです。

舞台芸術の力を信じ、劇場がまちと繋がり、人を育むことが本プロジェクトのビジョンです。

### スケジュール



## 地域を舞台芸術（アート）でつなぐこと

ファシリテーター 花崎攝（俳優・演出・ワークショップ進行役）

舞台芸術（アート）は創作上演したり、鑑賞したりするだけの芸術ではない。アートの中心には「遊び」がある。だから、子どもから大人まで、楽しみながら他者に出会い、共に人間や社会を探求し、表現し、伝えることができる。奇想天外、奇妙奇天烈なことも含めて、アートは自由な発想と表現を大切にするので、人を排除せず、多様な人が対等に会える機会を作る。そして、劇場は、本来、社会資本の一つとして、人が集い交わる場として誰にでも開かれている。

あうるすぽっとが、地域で子どもを見守り育てるNPOと連携することで、子どもや保護者、ボランティアなどが劇場に足を運び、舞台芸術を楽しむ。それだけでなく、子ども有志がアーティストと舞台に立つ経験をした。準備には大学生や地域の企業に関わるなど、多くの相乗効果が生まれた。

地域には、ありとあらゆる人がいて、様々な課題がある。不透明で、大きく変動する時代にあって、アートは、人と人の関わりを生み、地域をつなげ、新たな動きや価値を創出することができる。その可能性を拓くためには、息の長い継続的な活動と、もっと多くの人たちの参加が望まれる。

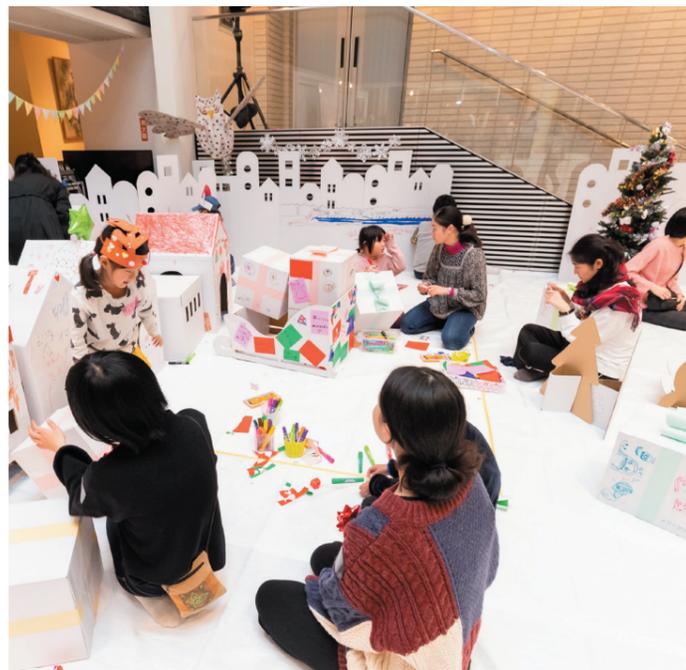


### プロフィール

劇団黒テントを経て、国内外で演劇プロジェクトの企画、進行、構成・演出をおこなう。開館当時から世田谷パブリックシアターの学芸事業にかかわる。障害のある人との活動や海外でのプロジェクトも多数。豊島WAKUWAKUネットワークとの活動は、2017年より継続中。ロンドン大学芸術学修士。企業組合演劇デザインギルド専務理事。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科、日本大学芸術学部演劇学科非常勤講師。

# あうる<sup>タウン</sup>町のクリスマス会

## 【1部】ホワイエプログラムレポート



ホワイエでのプログラムは、学生スタッフを中心となり、コンセプトの立案から運営までを担いました。子どもたちにとって、普段足を踏み入れない場所である劇場が、クリスマス会を通し、楽しい一日を過ごせる場所になることを目指し、テーマを「あうる<sup>タウン</sup>町のクリスマス会」と設定しました。企画のコンセプトには、集まった子どもたちやその家族によって飾りつけを施され、カラフルな町へと変化していく、会場全体がインスタレーション作品になる要素も含まれていました。学生スタッフからの提案をもとに、有限会社ヒゲプロにホワイエの空間デザインと装飾の製作を依頼。学生スタッフと作業を分担し、装飾の製作、会場準備が行われました。普段は、公演の開演前や休憩中にお客様の休憩スペースとして利用されるホワイエが、この日は、真っ白に雪化粧したあうる<sup>タウン</sup>町に大変身しました。

16時にあうる<sup>タウン</sup>町のクリスマス会はスタート。子どもたちは「WAKUWAKUネットワーク」のボランティアの方々の引率で、あうる<sup>タウン</sup>町にやってきます。ツリー飾りや、サンタ・トナカイの帽子を作る工作ブース。可愛いクリスマスの壁紙を背景にチェキの撮影を楽しむフォトスポットや、白を基調に作られた家や雪だるまのオブジェに自由に

### タイムテーブル

- 1部** 16:00～17:30  
(食事タイム 17:30～18:00)  
★クリスマスツリー飾り・ケーキ作りなど
- 2部** 18:00～19:30  
★パフォーマンス観賞



絵を描いたりするブースと、様々な各ブースに分かれ遊びました。17時からはクリスマスケーキの飾りつけもスタート。ボランティアの方々もケーキ作りや工作のフォローに入ってくたり、賑やかな時間となりました。

各ブースで遊んだ後は、お待ちかねの食事タイム。株式会社リジョブよりご協賛いただいたお米を使ったおにぎり弁当と、みんなで飾りつけたクリスマスケーキが配られました。あうる<sup>タウン</sup>町の蓮池町長(あうるすぽっと支配人)と、名誉町民の栗林さん(WAKUWAKUネットワーク理事長)、そしてゲストの衛藤内閣府特命担当大臣から子どもたちへ挨拶もありました。子どもたちやその家族、ボランティアやゲストの方々、みんなで床に座って楽しく食事タイムを過ごし、2部が始まる劇場へ移動しました。

子どもたちがパフォーマンスを鑑賞し終え、劇場からホワイエに戻ってくると、みんなで絵を描いたりして色を付けたオブジェを背景に、パフォーマーのサンタクロースたちが、お見送りのために待ち構えていました。子どもたちは、各企業からご協賛いただいたお菓子や文房具を詰め合わせたプレゼントをサンタクロースから受け取り帰路につきました。あうる<sup>タウン</sup>町のクリスマス会は大盛況に終了しました。

## 【2部】劇場プログラムレポート

### サンタとトナカイの「出会い」のダンス劇

舞台芸術を「観る」だけではなく、子どもたちが「体験・表現」できる場も必要と考え、ワークショップ2回・リハーサル1回・本番の計4日間を経たパフォーマンス公演を上演しました。

子どもたちと舞台芸術を繋ぐアーティストに、シルク・ドゥ・ソレイユにて850ステージに立った異色の経歴を持つダンス劇作家の熊谷拓明さんを招きました。踊る・喋る・歌うが絶妙なバランスにより成り立つ表現方法は「ダンス劇」と定義するのに違和感がありません。その表現方法で語られる物語は一貫して多くの人の生き方・生きづらさを肯定しています。

募集した子どもたち8人(中学生6名、高校生2名)とインターン2名が参加した物語は、熊谷さんと子どもたちが出会った経緯、「クリスマスにトナカイになって子どもたちと踊って欲しい」という劇場からのリクエストや練習開始の時間ぎりぎりまでゲームをしている子、休憩中に休まずボールで遊ぶ子どもたちの風景が織り交ぜられながら、パフォーマンスの締めくくりは、観客の子どもたちも舞台上がって一緒に踊り盛り上がり、「誰でもサンタになれる」という、勇気を持つことのできる作品になりました。



スタッフ  
振付・演出・出演：熊谷拓明  
演出助手：久世孝臣  
照明：加瀬隆純  
音響：石井浩美 舞台監督：八木橋貴之

## アーティストとして子どもたちへ出来ること

ダンス劇作家 熊谷拓明

今まさに(2020/3/7現在)アートは、ダンスは、演劇は何が出来るのか。を考える機会を改めて頂いたような日々を過ごし、そしてそんな機会でもなくとも、自分の活動や作品が誰かに何かをもたらす事が出来るのだろうか、幾度となく模索しながら41歳になる男が子ども達に出来ること。それは嘘を付かない事かと今は思っています。

嘘を見抜く力は大人よりも長けている子ども達。綺麗事を並べるにはあまりにも難しくなってきたこれからの生きる子ども達には、嘘なく大人が汚いなりに真摯に自分と向き合う姿勢を見せる事が、芸術や舞台が子ども達に贈り物を届ける唯一の手段だと感じるようになりました。



撮影：大洞博靖

プロフィール  
2008年より2年半シルク・ドゥ・ソレイユ『believe』に参加。ラスベガスにて850ステージに立つ。帰国後自ら演出、振付する作品を多数発表するようになり、次第に作品の中で台詞を使いオリジナルの物語を創作するようになり、自らの作品を『ダンス劇』と呼び始める。"踊る『熊谷拓明』カンパニー"を主宰するほか、振り付けやMCなど多方面で活動している。

## 参加した子どもたちから

すごく楽しかった。三日でできるとは思わなかったけど、スゴイいいのができてびっくりした。だけど、初日に覚えることが多すぎて練習2日目にはほとんど忘れていたことが少し迷惑だったかもしれないけど笑顔で対応してくれた熊谷さんは優しいと思った。やっぱりプロは違うと思った。

ダンスの練習は疲れたけど楽しかった。いろいろな動きを覚えるのが楽しかった。先生が面白くてかっこよかった。本番は先生を見れなかったけどモニターから見てたからよかった。本番は全く緊張しなかった。ステージの上で踊るのは楽しかった。

たったの三日間でみんなにダンスを教えたり、皆と仲良くしてくれて本当にありがとうございました。また、皆と踊れたらいいなと思いました。

ダンスは本当にすごく楽しかったです。特に子ども達とステージへ連れていって、一緒に踊ったこと。もっと長く踊りたかったです。ダンスをここまで仕上げられて驚きました。本当にありがとうございました。とてもいいクリスマスになりました。

# インターンレポート

## 「劇場＝ホーム」への道のりを

鈴木 理子

今回このインターンを通して、劇場に対する捉え方が大きく変わったと感じている。私は、ホワイエでのワークショップ企画とダンスパフォーマンスの稽古から本番までの運営を担当した。実施に漕ぎ着けるまでの間で学んだことから、芸術に対する教育と地域の劇場のつながりに関して、私の考えを述べる。

ワークショップ企画は、運営陣で数回に渡り打ち合わせをし、内容を固めた上で、アーティストの熊谷さんにお手伝いいただく提案をした。しかし、提案をしたのにもかかわらず数時間後には内容を全て変更してしまった。そこから本番までは、全員で集まる機会を確保できず、各々が用意できるものを着実に取り組んだ。今回は見切り発車であってもなんとか形になったが、現場では常に全体の進行度合いを俯瞰する目を持ちながら取り組む必要があると強く感じた。芸術の発展のために挑戦的、革新的事業に取り組むことも必要だが、現場の運営としては、できることとやりたいことの調整をして折り合いをつけることも大切である。

ダンスパフォーマンスでは、池袋に通学している中高生とコラボレーションを行った。参加者との会話の中で、「劇場は舞台制作・鑑賞を行うところで普段の自分たちには全く関係のないところのように感じていた」「普段足を踏み入れ慣れてないから、緊張する」という発言を耳にした。彼らは芸術、劇場に対しての興味や関心を持ってはいるものの、それを実際に身近なものとして感じられない様子が見受けられた。しかし、舞台上に立っている彼らは普段とは違った笑顔に満ち溢れているように感じた。

今回、あうるすぽっとの舞台上に立ったことは彼らにとっては非日常であったかもしれないが、わずかに数日間でも、劇場が自身の「ホーム」、日常の一部となったことを強く印象に残す体験ができたのではないだろうか。地域の劇場は子どもである自分たちにとって決して遠い場所ではなく、芸術は手を伸ばせば意外と身近にあることを知る機会の提供にもつながったのではないかと考える。そのための継続的支援として、中高生に対して「ホーム（劇場）はいつもここにある」ということを伝え続けることが必要ではないだろうか。

その取り組みとして、ボランティア、そして地域の公立学校と連携して年数回の自由参加型課外活動の開催を行うことを提案する。夏期休暇には夏祭りや、秋にはダンスフェスティバル、冬季休暇にはクリスマス会のように恒例の行事などの開催である。彼らが帰る場所として、あうるすぽっとを思い浮かべられるよう、地域と劇場、そして教育的支援の取組同士の結びつきを強めていくことが重要だと感じている。趣味として足を運ぶ人々が多い一方で、狭き世界として成立してしまう傾向がある劇場。より開かれた場所にするために、芸術に関する教育を充実させ、身近に感じられる環境を届けられるような事業を継続的に展開していくことが求められているのではないだろうか。今回、実際に事業に関わる経験を通して、革新を執拗に追い求めるのではなく、現場目線で物事の成功に必要な手順を確認しつつ実行に移すことの必要性、そして子どもたちが「劇場＝ホーム」と考えられる継続的支援の可能性を強く感じた。

## 子どもの貧困と芸術

田村 涼葉

### 1. 自分が思う企画の意義について

今回の企画にインターン生として参加し私が一番学んだことは、子ども時代に触れる芸術の重要性である。初回のレクリエーションで WAKUWAKU ネットワークの栗林さんのお話を聞き、そして自分で勉強を進めるうちに、子どもの貧困問題は日本で目立たずともかなり深刻なステージまできていること、そしてその解決が急がれることを学んだ。企画に参加するまでは、子どもの貧困問題の緊急さと深刻さに気がつかなかった。

それを踏まえた上で今回の企画内容を考える時に私が大切にしたいことは、「自分がやったことが芸術になる」という体験ができるということである。そこで、たった一日の経験がより心に残る経験にするためにはアウトプットを重視すべきだと考えた。「白い空間」「ソリ」のアイデアはそこから思い付いたものである。白を基調に作られたモチーフやオブジェに、当日子どもたちが自由に絵を描いたりするコーナーだ。しかし、単純に願い事を書いたり色をつけたりするだけでは、普通の落書きと変わらない。オブジェの一つとして置いてあったソリが、実際にシナリーとして舞台上に移動し、パフォーマンスを彩る一部となる仕掛けにした。自分たちが色付けたソリがパフォーマ

ンスの一部になるという感動を味わうことができれば、より深い思い出を刻むことができるのではと考えた。

### 2. 課題

当日は、1部がホワイエで工作や食事タイムと、2部が劇場でパフォーマンスを観る・参加する時間に分けられていた。第1部から第2部にかけての間において、子どもの興味の引き方の工夫に関してもっと時間をかけて考えるべきであったと感じた。なぜなら、今回の世界観のテーマカラーは白で、舞台設定は「あうる<sup>タウン</sup>町」という架空の町であったが、その世界観が子どもたちにうまく伝わっていないように感じたからだ。世界観を作り上げた理由の一つが、第1部と第2部のパフォーマンスまでの導入をよりスムーズに、よりわかりやすくするためであった。第1部と第2部が一連の流れとして扱われることは非常に重要であり、双方の意義を向上させるためには必要不可欠であると私は考える。しかし当日は時間が予想外に押すなどで想像以上に余裕がなくなり、本来時間をしっかりかけるはずであったらうことができなかった。感受性が豊かな子どもの集中力を切らさないためにも、第1部から第2部への間の組立にも時間を割くべきであったと考える。インプットの機会を提供することは比較的簡単だが、子どもたち自身のアウトプットを促すことは難しい。強要することなく、あくまで子どもたち主体としてアウトプットを促すためには、背景土台となるストーリー設定を固め、子どもたちが企画に集中できる環境を作ることが大切なのだと感じた。

## 地域社会・コミュニティにおける劇場の役割

埜 睦美

本レポートでは、クリスマス会の企画・運営に携わった経験を踏まえ、地域社会や地域コミュニティにおいて劇場が果たす役割について考察する。今回取り上げる事例は、WAKUWAKU ネットワークが実施している学習支援会の子どもたちとその保護者を招いたクリスマス会である。インターンシップ生が主体となって決定した「あうる<sup>タウン</sup>町のクリスマス」というテーマを掲げ、それぞれあうるすぽっとのホワイエと劇場を主な会場とした2部構成で開催した。

今回の企画において、私は子どもたちに渡す招待状のデザインやホワイエ空間の装飾案、白い壁・オブジェのデザインを主に担当した。実施にあたり時間の関係で、ホワイエ空間と白い壁・オブジェについては、デザイン案を示すにとどまり、製作の大

部分はヒゲプロのスタッフとあうるすぽっとの職員の皆様に作成していただくことになった。しかし、プロの方々のお力をお借りすることができたことは、今回の企画を成功に導くために重要な点だったと感じる。この事例を「地域と劇場」という論点に基づいて見ると、ヒゲプロという豊島区に拠点を置く企業団体とあうるすぽっとという劇場の二者が、これまでにいくつかの事業を協働して行ってきた事実の積み重ねが、今回に活かされていることを実感した。また、劇場が開館当初から培ってきた人脈や、前回のクリスマス会のことなど、属人的なものではあるが職員の方の経験、劇場の過去企画で用いた机や椅子、短冊などといった資源が活かされる場面に多く出会えたことは非常に印象的だったと言える。そして、今回のNPO法人豊島 WAKUWAKU ネットワークの皆様が主催されている学習支援会に通う子どもたちや保護者の方々を劇場に招き、パフォーマンスを観たりみんなでおいごりを食べたりしながらクリスマスの夜を過ごす、という企画自体が、地域と劇場のかかわりを生み出す上で大きな役割を果たしていたことは事実だ。

今後、地域と劇場が関わっていく上で指針となりうるのは、多様な考え方や価値観を認める可能性を示す基盤として機能することではないか。2015年9月にニューヨーク国連本部において開催された「国連持続可能な開発サミット」において採択された17のゴール・169のターゲットから構成される持続可能な開発目標＝SDGsでは、地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ことを誓っている。今回の企画で言うと、学習支援会というコミュニティがすでにある上で、(今回の参加者の多くにとって)「同じ地域にあるが馴染みのない場所」の代表とも言える「劇場：あうるすぽっと」を会場として行われるクリスマス会というイベントは、ひとりひとりの経験にとどまることなく、地域に存在する彼らの集合としてのいちコミュニティの中で経験として共有される中で、日常と非日常の交わる空間、さらには多様な価値観を内包し認める場所として知覚されたのではないかと。

SDGsの17のゴールの中には、社会における芸術のあり方についての言及は直接的にはなされていないが、今回のような社会包摂的な事業を推進することをはじめとして、「誰ひとり取り残さない」という17のゴールの前提となる考え方が劇場において実現されていくことは、大いに期待できると私は考える。

※以下、注釈  
2030アジェンダ：国際連合広報センターホームページ（最終閲覧日 2020年3月7日）[https://www.unic.or.jp/activities/economic\\_social\\_development/sustainable\\_development/2030agenda/](https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/)

## 参加者の声



あしをアウル町に踏み入れたときから  
うたを歌いたくなったぐらい  
るんるん楽しい時間を  
すタッフの皆様や子どもたちと過ごすことができ、  
ぼっかばかな心になった  
としまくのクリスマス会でした。

去年も参加させていただいてすごく楽しかったですが、今年は去年以上に楽しいクリスマス会でした！  
ケーキ作りやお芝居など、盛りだくさんの内容で、子どもたちも盛り上がっていたと思います！

WAKUWAKUの子だけでなく多くの地域の子もたちと出会えた1日になりました。当日は子どもたちを楽しませようと意気込んでいましたが、第1部では創る、第2部では表現により大人に笑顔を届けるような子どもが主体となる会だったと思います。子ども、親子、スタッフ、全ての方にとって素敵なクリスマス会でした。ありがとうございました。

子どもたちはもちろんのこと、参加した大人たちも本当に楽しんでいただけたのではないのでしょうか。少なくとも僕はそうです笑。会場の装飾から各ブース、劇などのイベントどれをとっても細かいところまで子どもたちへの配慮が感じられ、相当な準備をされてきたのだろうと思われます。それ故に子どもたちのたくさんの笑顔、そしてしつこいようですが参加させてもらった僕自身も笑顔がたくさん作らせてもらいました！「あの年のクリスマスはあうるすぽっとでこんなことしたね〜」と、何年たっても、きっと子どもたちの思い出に残る時間になったと思います。ありがとうございました〜

この度は子どもたちのために、素晴らしいクリスマス会を開催してくださりありがとうございました。目を輝かせながら楽しんでいる子どもたちを見て私も嬉しい気持ちになりましたし、何よりクリスマスイブに何の予定もなかった私にとって、大変ありがたいクリスマス会でした。もしかしたら子どもたちより楽しんでいたかもしれません。また、私も昨年から池袋で子ども食堂をやっているのですが、来月で丸2年になります。今までまったく縁もゆかりもなかった池袋という街で、このような活動をやっていけるのもWAKUWAKUをはじめ、こうした地域の繋がりがあってのことだと感じています。私も池袋という街が好きになりました。これからもみんなで池袋を盛り上げていければと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。この度は本当にありがとうございました。

## 「子どもたちにとっての劇場という場所」

栗林知絵子（特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKU ネットワーク理事長）

「全ての子ども・若者の権利が保障され、豊かな文化の中で自分らしく成長できるまちづくり」

これは「豊島区子ども若者福祉総合計画」の基本理念で、官民が目指すビジョンです。

私達は地域の子どもの地域で見守り育てるため、多様な「子ども・若者のための居場所」を運営している団体ですが、そこに包摂する彼らの中には、不登校や障がい、貧困、ルーツを外国にもっているなど、その背景はさまざまです。

こういった子ども達に豊かな文化を保障するのが、これからの「劇場」の役割のひとつだと私は考えます。その実践として、今回企画していただきました「地域のサンプラザプロジェクト」は、子ども達が自由に表現し、新しい価値観に出会うチャンスのある場として、大変すばらしい成果といえます。

これからも、置かれた環境に左右されることなく、子ども達がそれぞれの未来を明るいものとするため、劇場の役割は大きくなっていくでしょう。これからの発展に期待します。



## 協賛企業

株式会社池袋ショッピングパーク



一般社団法人としまアートカルチャーまちづくり推進協議会



Tohato



REJOB

(五十音順)

デザイン：有限会社ヒゲプロ 写真：和知明 (BrightEN photo)

編集・発行：あうるすぽっと (公益財団法人としま未来文化財団)

170-0013 東京都豊島区東池袋 4-5-2 ライズアリーナビル 2F・3F

TEL.03-5391-0751 FAX.03-5391-0752

URL.https://www.owlspot.jp/

禁無断転載

2020年3月発行